

白山の自然誌 22

# 市ノ瀬周辺の自然



2002年3月

石川県白山自然保護センター

## はじめに

白山の石川県側の登山口として知られる市ノ瀬。市ノ瀬ビジターセンターや白山温泉の旅館の他、キャンプ場や、遊歩道のある園地などがあり、春から秋の登山や行楽のシーズンには賑わいます。

ここは岩屋俣園地の起点になっている他、根倉谷園地も近くにあり、またチブリ尾根や白山禅定道、釈迦新道などの登山道への起点でもあります。これら登山道は、白山登山のみならず、半日、1日のハイキングコースとしてもよく利用されています。

市ノ瀬は、昭和の初めには出作りが8戸あったといえます。1934年（昭和9年）の手取川大水害で、それらは全て流失し、それまでの細い川が、上流からの大量の土石に埋まり、広い河原となったのです。昔の白山温泉は、今の位置ではなく、湯の谷左岸の、六万山のふもとに3戸あり、これらも同じ水害で流失しました。その後、昭和30年代までは一年を通して人が住んでいましたが、やがて春から秋までの生活だけとなり、天候の厳しい冬の4~5か月間の定住者はいなくなりました。

この市ノ瀬周辺の自然を中心に、歴史的なことも含め紹介したのが、この冊子です。ここを訪れる人々に、自然の理解やその保護への関心を少しでも深めていただければ幸いです。



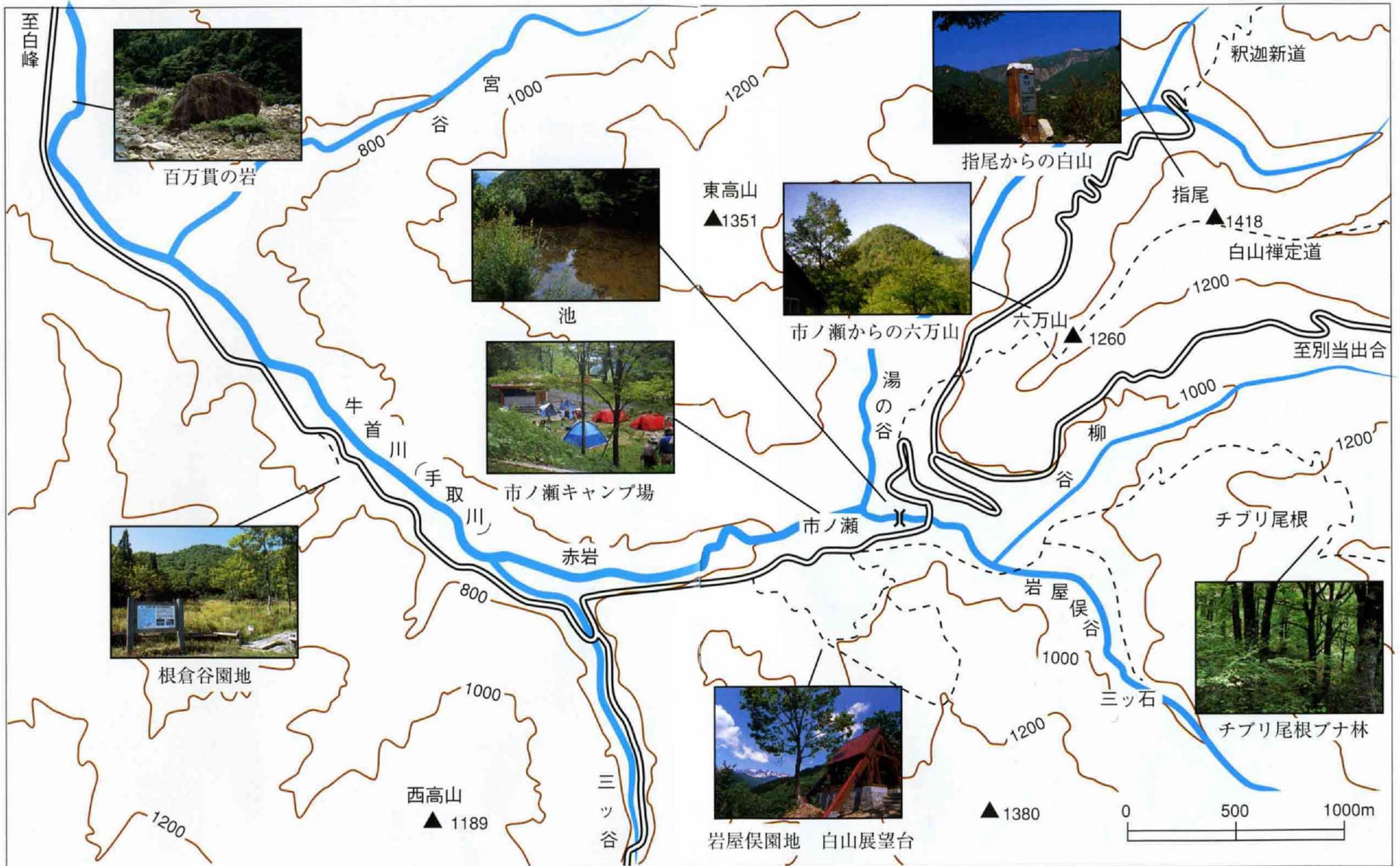
冬の白山温泉 永井旅館

表紙：市ノ瀬ビジターセンター、裏表紙：白山展望台からの白山

## も く じ

市ノ瀬周辺図	2
手取層群の化石と珪質砂岩	4
百万貫の岩	5
三ツ石	6
禪定道と白山温泉	7
昔の生活と変遷	8
トチノキとトチ餅	10
春植物	11
ミズバショウ	12
ドロノキ	13
花ごよみ	14
池の生き物	16
カタツムリの仲間	17
ブナ林のセミ	18
クマを見つけよう	19
ブナ林の鳥と環境	20
鳥と季節	21

市ノ瀬周辺図



## ▶▶ 手取層群の化石と珪質砂岩 ◀◀

石川県の手取川上流域を中心として、福井、岐阜、富山の各県にまたがって広く分布する手取層群と呼ばれる地層があります。今から1億数千万年前、地質時代でいう中生代のジュラ紀から白亜紀にかけて形成された堆積層です。泥岩や砂岩、礫岩などからなるこの地層には、シダ類やソテツ類、イチョウ類などの植物化石、貝類や魚類、カメ類、哺乳類型爬虫類、そして恐竜などの動物化石が多産することで知られています。

市ノ瀬周辺、チブリ尾根、砂防新道、観光新道など、利用者の多い登山道沿いには、手取層群のうち赤岩層と呼ばれる地層が広く分布しています。市ノ瀬の近くでは、チブリ尾根へ行く道の岩屋俣谷右岸の崖や河原に化石が入っている石が見つかります。

化石とともに目立つのは、丸く磨かれた堅い石です。登山道に、まるで玉砂利を敷いたように転がっていたり、岩の中に丸い石が含まれているのを目にします。この丸い石は珪質砂岩に分類されるもので、もともと大陸にあったと考えられている古い石です。



イチョウ類の化石



シダ類の化石



貝類の化石



丸い珪質砂岩が含まれる岩

## ▶▶ 百万貫の岩 ◀◀

白峰から市ノ瀬への途中の、車道から見える川の中にある大きな岩です。場所は牛首川（手取川）の支流の一つ、宮谷の出合から約1km下流です。この岩は、1934年（昭和9年）の手取川大水害の時の土石流で、元々あった宮谷から、約3kmも流れてきたことが分かっています。

このような大きな石がどのようにして流れるのか不思議ですが、次のように考えられています。この年は白山の残雪が、例年以上に多かったといえます。そこに梅雨末期の温かい大雨が降ったのです。その雨量は大水害の発生するまでの3日間で、白峰で484mmにも達したそうです。この大量の雨と雪解け水が、白山の各地に土砂崩れを起こしました。比較的傾斜の緩い宮谷でも、方々で土砂崩れが起こり、規模の大きな土砂崩れが谷をふさいだと考えられます。つまり天然の大きなダムを造ったのです。やがてそのダムは耐えきれなくなって壊れ、一気に土石流となります。規模が大きいくだけに、その力も大きく、巨大な岩をも流してしまったのです。

百万貫（3,750トン）の岩と言われていましたが、1995年に建設省金沢工事事務所が計測した結果によると、4,839トンとなり、百万貫をはるかに越えていることが判明しました。流れ出た岩としては国内最大級の大きさであることから、2001年12月25日に「白峰百万貫の岩」の名称で、石川県の天然記念物に指定されました。この岩は、珪質砂岩の丸い石を含む砂岩で、手取層群の地層に含まれていたものです。

この岩の前に立つと、土石を巻き込んだ流れの恐ろしさ、自然の力の偉大さを感じずにはおられません。



## ▶▶ 三 ツ 石 ◀◀

牛首川（手取川）の柳谷川と岩屋俣谷川の出合から約1km岩屋俣谷川に入ったところに、地元の人たちに「三ツ石」と呼ばれてきた場所があります。以前は、この谷の右岸に歩道があり利用されていたので、地名がついたのでしょう。チプリ尾根への道の途中から岩屋俣谷川へ入る車道があり、それを行くと三ツ石の近くの河原へ出ます。

3つある石のうち2個は右岸に、1個は左岸にあります。どれも大きく、最大のもは百万貫の岩と同じくらいの大きさがあります。そして岩の種類も百万貫の岩と同じで、丸い礫を含む砂岩で手取層群に由来しています。

さてこの岩はどのようにして、今の位置におさまったのでしょうか。その形が角ばっていること、またこれらの岩のすぐ上流で川幅が狭くなっていることから、百万貫の岩のように、上流から流れ下ってきたものではないと判断されます。おそらく地滑りや地震などの際に、近くの斜面から崩れてきたものと考えられています。

長い間ここにあったと思われ、その上に草木が育ち、中には太いブナが立っている岩もあります。この岩と岩屋俣谷の清流を、一度訪ねてみませんか。



三ツ石（右岸下流）



三ツ石（右岸上流）



三ツ石（左岸）



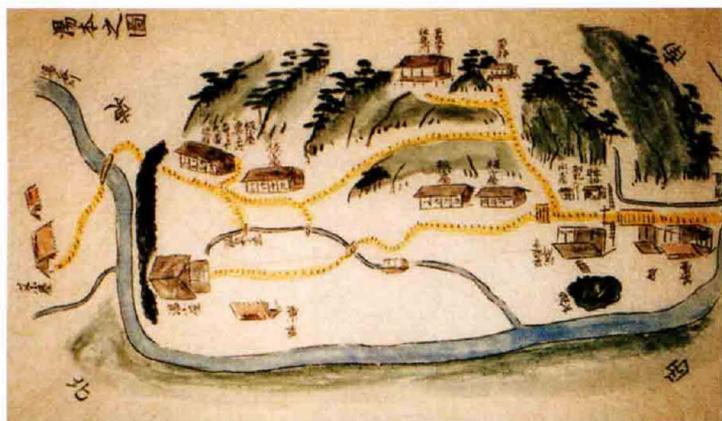
上流から見た三ツ石

## ▶▶ 禅定道と白山温泉 ◀◀

白山の登山道を昔は禅定道と呼びました。禅定とは、神や仏の住む聖なる靈山に登って修行すること。またその靈山の頂上を指す言葉です。平安時代前期頃から、白山には3つの禅定道があり、その一つ越前禅定道は、今の福井県勝山市平泉寺白山神社を起点に、県境にある赤兎山と大長山との間の小原峠を越えて、三ツ谷、市ノ瀬を通り、今の白山禅定道から白山山頂へ向かっていました。白山禅定道の六万山から観光新道との分岐までの間に、檜宿、指尾、剃刀窟、五輪坂、慶松平などの地名が知られています。小原峠とは別に、1500年代には谷峠（現在国道トンネルがある）を越えて牛首（白峰）・風嵐経由の登山参詣者の方が増えていたともいわれています。

昔は「一之瀬」と書き、江戸時代の1606年に福井藩祖結城秀康が白山の温泉に入湯されたとあります。また1728年に書かれた文書には、それ以前から市ノ瀬には平泉寺支配下の宿などがあり、湯治場として白山登拝者が利用していたとあります。また1833年の文書「続白山紀行」には、湯の谷左岸に湯本之図として、湯小屋、板小屋などと共に、平泉寺役所、平泉寺休息所、薬師堂などが描かれています。場所は今の六万山のふもと、湯の谷左岸です。

明治になると、同じ場所に山田屋とさつま屋の2旅館ができ、はじめ一之瀬温泉と呼ばれていたが、後に白山温泉と呼ばれるようになったようです。そして1927年（昭和2年）に、今の市ノ瀬に新しい温泉（一之瀬温泉）が開かれ、林屋旅館ができますが、1934年の水害（5ページ参照）で、両温泉とも土石流に埋まってしまいます。その翌年（1935年）、市ノ瀬に永井旅館ができ、白山温泉として現在に至っています。



湯本之図（「続白山紀行」より）

## 昔の生活と変遷

もともと市ノ瀬は、一之瀬（一ノ瀬）と書き、三ツ谷、赤岩と共に河内こうちと呼ばれていました。生活は焼畑耕作中心の自給自足が基本で、ヒエやアワ、ソバ、アズキ、ダイズなどを輪作形式で作っていました。そしてゼンマイ、ウド、フキなどの山菜類やナメコ、ムキタケなどのキノコ類、ノウサギ、クマ、カモシカ、ヤマドリ、イワナなどを取って暮らしていました。他には、ヒノキ（笠木と呼び、笠を作った）やシナノキ（繊維で縄などにした）、薬草の採取などでも生計を立てていました。

明治になると、ブナなどで鋤の柄やコシキ（雪かき板）の生産が（これらは背に担いで勝山や白峰へ出した）、後にはこれに替わって養蚕業が盛んとなり、現金収入が得られるようになりました。そして大正時代末（1924年）に、市ノ瀬まで車道が延びると、今度は製炭業が盛んとなり、養蚕業と入れ替わっていきました。しかしながら、たび重なる凶作や洪水などで生活は厳しく、北海道への集団移住などで人口は少なくなっていました。

1934年7月10日現在で、市ノ瀬8、白山温泉場3、三ツ谷13、赤岩20の家族がいましたが、7月11日の大洪水で、市ノ瀬と白山温泉場の全てと、赤岩の12戸が土石流に埋まるか、流されてしまいました。これが原因で、再び移住していった家があります。1955年ころには、季節作りを含め21戸が炭焼きや焼畑を行っていましたが、燃料革命による製炭業の衰退や1961年の北美濃地震などを契機に、同年、最後まで残っていた18戸が離村し、定住者はいなくなりました。その後は、春から秋の間だけ、登山者を中心とする観光客のための旅館やビジターセンター、また砂防工事関係の事務所等が開かれています。明治時代以降の市ノ瀬に関係する事項を年表にしました。



焼畑の火入れ



コシキ

## 明治時代以降の市ノ瀬関係年表

1868	福井藩となる。
1868	勝山から旅館業者が進出。さつま屋旅館(後に白山館)と山田旅館。一ノ瀬温泉、後に白山温泉と呼ぶようになる。
1872	白山麓諸村石川県の所管、能美郡に属する。
1872	市ノ瀬の温泉支配権、平泉寺から牛首村、山岸十郎エ門氏に移る。
1874	御前峰の十一面観音座像などと共に、市ノ瀬の薬師堂の薬師如来が林西寺に運ばれる。
1876	牛首・風嵐・河内3か村合併し白峰村ができる。
1913	白山砂防工事着手される。
1922	白山登山者保護のため夏季市ノ瀬に巡査出張所が設置される。
1922	白山に県費の室堂建設される。
1924	鶴来～市ノ瀬車道開通(砂防工事の資材運搬)。炭焼きが広まる。
1926	この頃、山田屋旅館、白山館ともに別館を新築し、白山温泉の収容人員400名となる。
1927	白山砂防工事が国営となる。
1927	市ノ瀬に林屋旅館、新温泉浴場(一ノ瀬温泉)、砂防工事事務所、営林署出張事務所などができる。
1934	7月11日手取川大洪水で、白山温泉、市ノ瀬の人家土石に埋まる。
1935	市ノ瀬に永井旅館(現存)できる。
1946	白峰～市ノ瀬間に夏期のみバス開通する。
1955	白山国定公園指定される。
1958	市ノ瀬発電所完成。
1961	三ツ谷・赤岩住民全員離村。
1962	白山国立公園指定される。
1965	登山バス別当出合まで延長される。
1967	市ノ瀬登山センター開設される。
1984	市ノ瀬キャンプ場開設される。
1992	市ノ瀬に国設鳥獣保護区管理センター開設される。
1997	根倉谷園地開設される。
2000	岩屋俣園地開設される。
2000	市ノ瀬ビジターセンター開設される。

(「白峰村史」、「白山の埋み火」、その他による)

## トチノキとトチ餅

トチノキは、ブナ帯の中でも谷筋などの平坦地によく見られます。落葉高木で、大きいものでは高さ30mを越え、直径2~3mになります。白峰村には、国指定の天然記念物「太田の大栃」があり、幹周り13mの日本一のトチノキといわれています。

楕円形で手のひら状に分かれた5~7枚の葉が合わさって一枚の大きな葉になっており、秋に黄葉します。花は5~6月ころ、枝先に白色の大きな円錐形のを多数つけます。また花からは良質のハチミツがとれ、市ノ瀬周辺でも季節になると養蜂箱が置かれます。種子はクリの実に似た色で、丸みを帯びています。木は庭木や街路樹として使われ、材は木目がきれいで加工しやすく、家具や楽器、建築材となります。

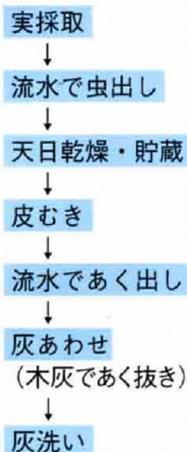
市ノ瀬の岩屋俣園地にもトチノキはありますが、チブリ尾根の登山道沿いには大木が何本もあります。白山ろくでは、昔から実を広くトチ餅に利用してきました。しかし、あくが強く加工に手間がかかるので、今では作る人は限られ、もっぱら数軒のトチ餅専門の店で作られ、白峰村の名物として知られています。あく抜き工程は、概ね図のようになっていますが、特に「灰あわせ」は、長年のカンが頼りの最も難しい作業で、人それぞれに秘伝があるそうです。



トチノキ



実



あく抜きの工程

## 春 植 物

種子植物は、太陽の光を受け、光合成をして栄養分を根や茎に貯え、また花をつけ実を結びます。その期間は様々で、例えばヒマワリは春に芽生え、夏に花が咲き秋に実をつけます。しかし、ここで紹介するのは、春のほんの一時に、花が咲き、実を結んで地上部が枯れてしまう植物です。それは春植物、またスプリング・エフェメラル（春のはかない命）と呼ばれる植物です。

ブナ林など落葉広葉樹の林では、ブナやミズナラなど高木が葉を広げると、それらの林の下へは、太陽の光はほとんど届かなくなります。そこで林の下の地面に生える植物は、少ない光でも育つものの他は、高木が葉を広げる前に芽吹いて花を咲かせ実を結んでしまいます。そして1か月もすれば、地上部分は姿を消し地下での長い眠りに入ります。

春植物の代表にはよくカタクリがあげられますが、なぜか白峰村にはほとんど見つかりません。市ノ瀬の周りにも見つかりません。市ノ瀬や周辺の本ナ林には、ミヤマキケマン、キクザキイチリンソウ、ニリンソウ、スミレサイシン、エンレイソウなどがあります。市ノ瀬付近では4月下旬から、標高の高い本ナ林では5月下旬にかけて、雪が消えたところから、次々と花を咲かせているのを見ることができます。

これらの花の多くは、種子の散布にアリなどの助けを借りています。それは、種子にエライオソームと呼ばれる付属物があり、これにはブドウ糖などの糖類や、パルミチン酸やリノール酸などの脂肪酸を含んでおり、美味しい食べ物となるので巣へ運ばれるのです。そこで、エライオソームの部分は食べられますが、種子の部分は無傷のまま、巣の近くに捨てられるので、そこで発芽するというわけです。植物と昆虫の、お互い持ちつ持たれつの不思議な関係です。



キクザキイチリンソウ



ニリンソウ

## ▶▶ ミズバショウ ◀◀

白山ろくに春の訪れを知らせてくれる花の一つがミズバショウです。湿地一面に咲いているのをよく見かけますが、林の中の水辺にも見つかります。白い花びらのようなものは、葉の変化したもので苞（ほう 仏焰苞）と呼ばれます。これに包まれた中に棒状に伸びているのが花の集まったものです。花が開くと雄しべの花粉の黄色が目立ちます。よく観察すると雄しべ4本と雌しべ1本が分かります。花が終わると、ほうは枯れて落ちます。やがて、果実は緑色に熟します。そのころには葉は大きく開き、長さ1mにもなることがあります。この葉が、芭蕉布の材料にするバショウの葉に似ており、水辺にあることからミズバショウの名前が付いたといわれています。

市ノ瀬にも少しありますが、根倉谷園地や大嵐山の大自然がよく知られています。4月下旬から5月上旬が花の見ごろです。標高の高いところでは、雪解けが遅く、砂御前山付近では5月下旬から6月上旬、白山釈迦岳の標高2,000m前後では6月下旬から7月上旬に花の時期となります。

ミズバショウに似て、苞が紫色の植物にザゼンソウがあります。この花はミズバショウのような湿地ではなく、山地の水はけのよいところにあります。2つともサトイモの仲間ですが、人の食料にはなりません。しかし、ツキノワグマが、これらを食べます。



根倉谷のミズバショウ群落



ミズバショウ



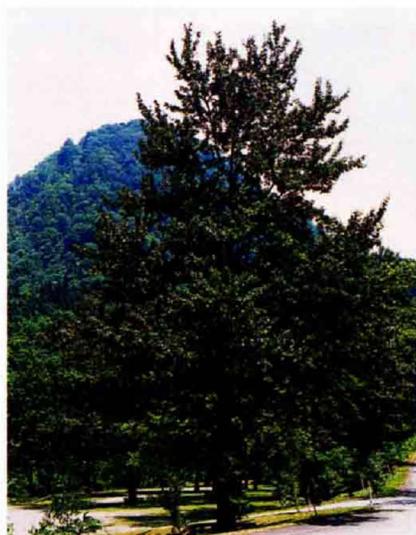
ザゼンソウ

## ▶▶ ドロノキ ◀◀

市ノ瀬の駐車場や観察路にある最も背の高い木がドロノキです。ヤナギの仲間なのでドロヤナギとも呼ばれます。大きなものでは高さ20~30m、直径1~1.5mになります。川沿いの湿ったところに生育し、市ノ瀬の他、チブリ尾根への道の岩屋俣谷と柳谷で囲まれた河原にたくさんあり、別当出合の河原にも見られます。

その名前は、材質が柔らかく、余り役に立たないところから「泥のように役に立たない」という意味からとも言われています。しかし、加工技術の進歩により、今では建築材、船舶材、マッチの軸木、パルプ材など、用途は広がっています。

この木の雌花は、他のヤナギのように尾状に垂れ下がり7~9cmになります。花が終わると、のびて15~30cmの長さとなり、たくさんの実をつけます。8月中旬ころから、この実は4つに裂け、中から白い綿毛に包まれた種子が出てきます。ちょっとした風に揺すられるだけで、乾燥した種子は舞い飛び、晴れた日なら上昇気流によって上空高く舞い上がる種子が、あたり一面に見られます。9月から10月上旬にかけての秋の一日、晴れた日に市ノ瀬を訪ねてみてください。



ドロノキ



ドロノキ林



種子

# ▶▶ 花ごよみ ◀◀

種名	5月			6月			7月			8月			9月			10月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
ミズバショウ	○	○																
イワウチワ	○	○																
キクザキイチリンソウ	○	○	○						イワウチワ			サンカヨウ						
ミヤマキケマン	○	○	○	○	○													
ニリンソウ	○	○	○	○	○													
ホンシャクナゲ		○	○															
サンカヨウ		○	○	○														
ミヤマカタバミ		○	○	○	○													
エンレイソウ		○	○	○	○													
チゴユリ			○	○	○				タニウツギ			ツリフネソウ						
ユキザサ			○	○	○													
タニウツギ			○	○	○	○												
トチノキ			○	○	○	○												
ホオノキ				○	○	○												
ギンリョウソウ					○	○	○											
イワガラミ					○	○	○	○										
ツルアジサイ					○	○	○	○										
コアジサイ						○	○	○	○									
エゾアジサイ						○	○	○	○	○								
クガイソウ								○	○	○	○							
ノリウツギ									○	○	○	○						
フジアザミ											○	○	○					
オトコエシ	クガイソウ										○	○	○	○				
キンミズヒキ											○	○	○	○				
クサボタン												○	○	○				
ハクサンカメバヒキオコシ													○	○	○			
ツリフネソウ												○	○	○	○			
アケボノソウ													○	○	○			
オオアキギリ													○	○	○	○		
ミゾソバ	エゾアジサイ												○	○	○	○		

## 池の生き物

市ノ瀬の六万橋のすぐ下流右岸に駐車場があり、その奥の山沿いに池が2つあります。43m×17mの池と、すぐそばに並んだ7m×4mの小さな池です。元々は砂利を洗う人工池だったのですが、使用されなくなってから年月がたっており、今では池にはフトヒルムシロやクログワイ、ガマなどの水生植物が生え、周りにはアブラガヤやススキなどの草本、オノエヤナギ、イヌコリヤナギなどの低木が生えています。池の後方にはミズナラ、クリ、トチノキなどの高木の林があり、あたかも自然の池のように見えます。

この池の中にはイモリが、水面にはアメンボが見られ、5～6月にはモリアオガエルの白い卵塊が水面の上の木の枝にぶら下がります。またエゾイトトンボ、ホソミオツネントンボ、コサナエ、オオルリボシヤンマ、シオカラトンボ、オオシオカラトンボ、アキアカネ、ノシメトンボなどのトンボが確認されています。この中でエゾイトトンボとコサナエは春にだけ見られ、5月にはエゾイトトンボが多く、雄と雌がつながって水面近くの植物に産卵しているのが見られます。ホソミオツネントンボは成虫のまま越冬し、春に産卵します。オオルリボシヤンマは、7月に水面近くの草や木で羽化し、そのぬけがらがたくさん見られます。秋になるとアキアカネやオオルリボシヤンマなどが産卵に訪れます。

市ノ瀬周辺には、このような池は他にはありませんので、水生植物や池に集まる動物たちには貴重な場所といえます。ここへは車で行くこともできますが、市ノ瀬の駐車場の奥から吊り橋を渡って歩いていくことができます。休憩舎も設けてありますので、散策がてら訪ねてみてください。



池の景観



モリアオガエルの卵塊

## ▶▶ カタツムリの仲間 ◀◀

陸にすむ貝類（カタツムリやナメクジの仲間）で、白山とその周辺で今までに記録されているものは40種あります。その中で、比較的好く見つかるのは、ハクサンマイマイ、クロイワマイマイ、コシダカコベツマイマイ、ヤマナメクジなどの大型の種類です。登山道でよく目につくのはハクサンマイマイでしょう。ハクサンマイマイはブナ帯から亜高山帯上部までの広い範囲に分布しており、背に黒い縦線がのびている大型のカタツムリです。色帯と呼ばれる、貝殻を黒く巻く帯のつきかたに様々なタイプがあり、帯のまったくないものから、全体に帯があるものまでありますが、同じ種類です。

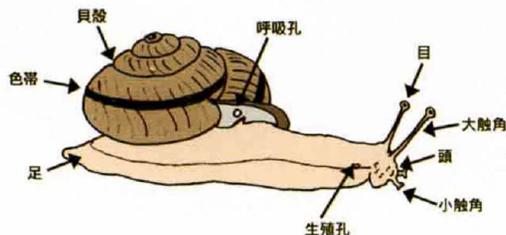
カタツムリの体のつくりは図に示したように、頭に2対の触覚があります。上方にあるのが大触覚で、先端に目があります。下方にあるのは小触覚で、匂いをかきながら食べ物をさがします。カタツムリやナメクジは雌雄同体（一つの体に雌と雄の形質がともに発達している）で、梅雨などの大気の湿った時期に出合った2ひきが生殖孔から管を出し、精子の入った袋を交換させて交尾します。乾燥しているときは貝殻の中に体を隠し、体から出した粘液の膜で蓋をして、落ち葉の中や木の枝に接着して休んでいます。このような性質から、朝の露が出ているときや、雨が降っているときが、観察に適しています。



ハクサンマイマイ



ヤマナメクジ



カタツムリの体のつくり

## ▶▶ ブナ林のセミ ◀◀

市ノ瀬周辺で鳴き声を聞くことのできるセミは、エゾハルゼミ、コエゾゼミ、ヒグラシ、ミンミンゼミ、チッチゼミの5種類くらいです。この中でエゾハルゼミとコエゾゼミはブナ林を中心とする山地性のセミで、時には標高2,000mをこえるところでも鳴いています。他のセミは、平地から低山を中心に生息しており、ブナ林にもいますが数は多くありません。

この中で一番早くから鳴き出すのはエゾハルゼミです。5月中・下旬から7月中旬頃まで出現し、晴れた暖かい日にはよく鳴いています。その後、入れ替わるようにコエゾゼミが鳴き出します。ヒグラシやミンミンゼミは7月～8月に、またチッチゼミは8月～9月に鳴いています。

ブナ林の中でセミを見かけることはまずありませんが、鳴き声に特徴があるので区別できます。セミの大きな声は、腹の中にある発音筋の収縮運動で、発音板という器官が振動し、腹の中の空洞が共鳴して起こります。

セミの種類	鳴き声
エゾハルゼミ	ヨーギ、ヨーギ、ヨーギ、ギギギギ
コエゾゼミ	ギィー---
ヒグラシ	カナ、カナ、カナ、カナ
ミンミンゼミ	ミーン、ミン、ミン、ミン
チッチゼミ	チッ、チッ、チッ、チッ、チッ



エゾハルゼミ



コエゾゼミ(左上) ヒグラシ(右上)  
ミンミンゼミ(左下) チッチゼミ(右下)

## ▶▶ クマを見つけよう ◀◀

ツキノワグマ（以下クマ）は、全国で10,000頭、石川県には500～600頭が生息すると言われています。なかでも白山地域はクマの生息地として古くから知られています。クマは森林にすみ、単独で生活していることが多く、見つけることは難しい動物です。しかし春の残雪期は、唯一クマを見つけるのに適した季節です。木の葉が芽吹く前の山々は見通しがよく、遠くからでも雪の上や草地に、クマの黒い姿がくっきりと浮かび上がります。

白山地域では古くからクマ猟が行われ、春の残雪期には「巻き狩り」と呼ばれる伝統的な方法が、クラとかホングラと呼ばれる場所で行われました。クラとは岩場のことで、ホングラは他に落葉広葉樹のブナやミズナラ、常緑針葉樹のクロベやキタゴヨウが生育していて、クマの餌場と休み場や隠れ場を兼ね備えた場所のことです。毎年同じところで捕れることから、その場所には地名がついていました。市ノ瀬付近には「今宿」、「ハットノ湯」、「サヨモ谷」、「奥天井」などがホングラとして知られてきました。また、ナーバタ（ナバタ）と呼ばれる、クマが食べるウドやアザミなどが芽吹く草地も猟をする場所になりました。そしてブナに花が咲いた年には、これを食べに登っているところを見つけることもできます。

市ノ瀬から釈迦新道への道の途中から湯の谷右岸の斜面で、また別当出合付近からチブリ尾根の斜面で、4月下旬から5月中旬ころならクマを見つけることができるかもしれません。



ナバタに出てきたクマ



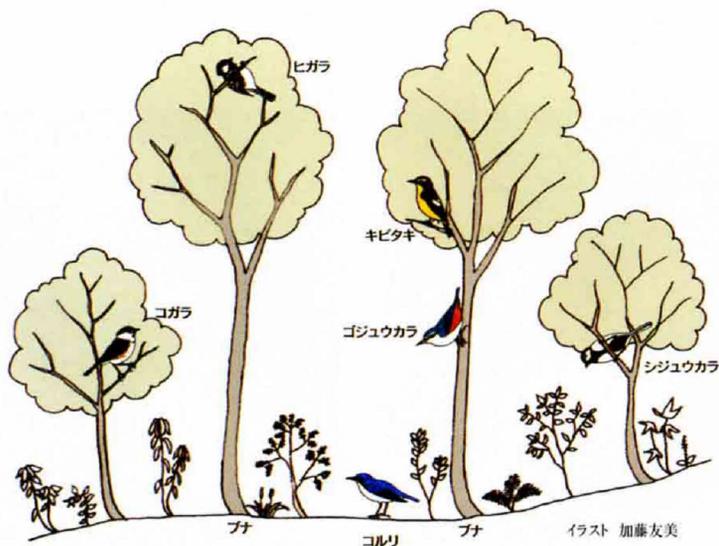
ブナに上がっているクマ

## ▶▶ ブナ林の鳥と環境 ◀◀

チブリ尾根のブナ林は、林の中の構造が、高木層、亜高木層、低木層、草本層と、何層にも発達しています。そして、沢が流れていたり、高茎草原、低木林、ササ原など、変化に富んだ環境があります。そのおかげで、ここには多くの種類の鳥が生息しています。

春から夏の繁殖期に記録された鳥は35種になります。なかでも数が多いのは、ヒガラ、コガラ、シジュウカラ、コルリ、ゴジュウカラ、キビタキです。カラ類と呼ばれる仲間と夏鳥のコルリ、キビタキです。主にいる場所は、ヒガラは高木層、コガラやシジュウカラは低木層、ゴジュウカラは高木の幹、コルリは比較的明るい林の低木の茂みや地上、キビタキは高木の林の中で、空間の広がりのあるところなどです。同じ種類のなかでは、ナワバリを作って一定の距離を置いて分布し、雛を育てています。

秋になると、夏鳥はいなくなり、今度はアトリ、ツグミ、マヒワなどの冬鳥が見られるようになります。また、繁殖期に多かったヒガラ、コガラ、ゴジュウカラ、シジュウカラも一般的な鳥です。これらカラ類と呼ばれる鳥は、違う種類でありながら同じ群れには入り行動しています。この群れをカラ類の混群と呼びます。



ブナ林の繁殖期の主な鳥の生活場所

## 鳥と季節

市ノ瀬から別山・市ノ瀬道を利用してチブリ尾根のブナ林までのコースで、鳥の種類が季節でどのように変化しているかを調べました。ここでは、大きく2つの環境に分けることができます。一つは川沿いの草原、低木の多いドロノキ林などで、今一つはブナを中心とする林です。標高的には前者が標高830～930m、後者は標高930～1,650mです。2つの環境に生息している主な鳥を季節別に示したのが表です。ここでは5～6月を春、7～8月を夏、9～11月を秋、2月を冬としてあります。また、春から夏に数の多い鳥の順に並べてあります。期間を通して見られる鳥と、見られる季節に限られる鳥があること、2つの環境で数の多い鳥に大きな違いのあること、また両方の環境にいる鳥と一方のみの環境にいる鳥があること、両方にいても季節によって、いたりいなかったりする鳥があることなどがわかります。

	春	夏	秋	冬		春	夏	秋	冬
カケス	●	●	●	●	カワガラス	●	●	●	
ホオジロ	●	●	●		ミンサザイ	●	●	●	
キセキレイ	●	●	●		エナガ	●	●	●	
ヒヨドリ	●	●	●		ヤマガラ	●	●	●	
ウグイス	●	●	●		セグロセキレイ		●	●	
オオルリ	●	●			アトリ			●	
ヤブサメ	●	●			ツグミ			●	
アオゲラ	●		●		コガラ			●	●
コゲラ	●	●	●	●	ゴジュウカラ				●
シジュウカラ	●	●	●	●	オンドリ				●

ドロノキ林 (830～930m)

	春	夏	秋	冬		春	夏	秋	冬
ヒガラ	●	●	●		マミジロ	●	●	●	
コガラ	●	●	●	●	コゲラ	●	●	●	●
シジュウカラ	●	●	●	●	メボソムシクイ	●	●	●	
コルリ	●	●			ヒヨドリ	●	●		
ゴジュウカラ	●	●	●	●	アトリ				●
キビタキ	●	●	●		マヒワ				●
ミンサザイ	●	●	●		ツグミ				●
クロジ	●	●	●		ホシガラス				●
ウグイス	●	●	●		エナガ			●	●
カケス	●	●	●		アオゲラ	●	●	●	●

ブナ林 (930～1,650m)

本誌を書くにあたり、「白山自然ガイドマニュアル」(2000)を参考にしました。

写真：三原ゆかり・東野外志男・野上達也・野崎英吉・上馬康生

白山の自然誌 22	発行日	平成14年3月25日
	文・構成	上馬 康生
	編集・発行	石川県白山自然保護センター
市ノ瀬周辺の自然		石川県石川郡吉野谷村字木滑ヌ4
		Tel.07619-5-5321 Fax.07619-5-5323
		E-mail hakusan@pref.ishikawa.jp
	印刷	㈱大和印刷社

